

かぞくのはなし きむら あきこ

第二話 手元のジェノグラム_{その2}

前回に引き続き、団士郎先生の「家族理解ワークショップ」でのジェノグラム面接演習で描かれた、「私のジェノグラム」を使って被援助者体験からの発見をお伝えしたいと思います。仕事や子育てに全力投球していた時期に、ついつい心の余裕をなくしてしまっていて、あれこれ子どもに要求してしまっていたことがあったなあ、と自分自身を思い出しました。

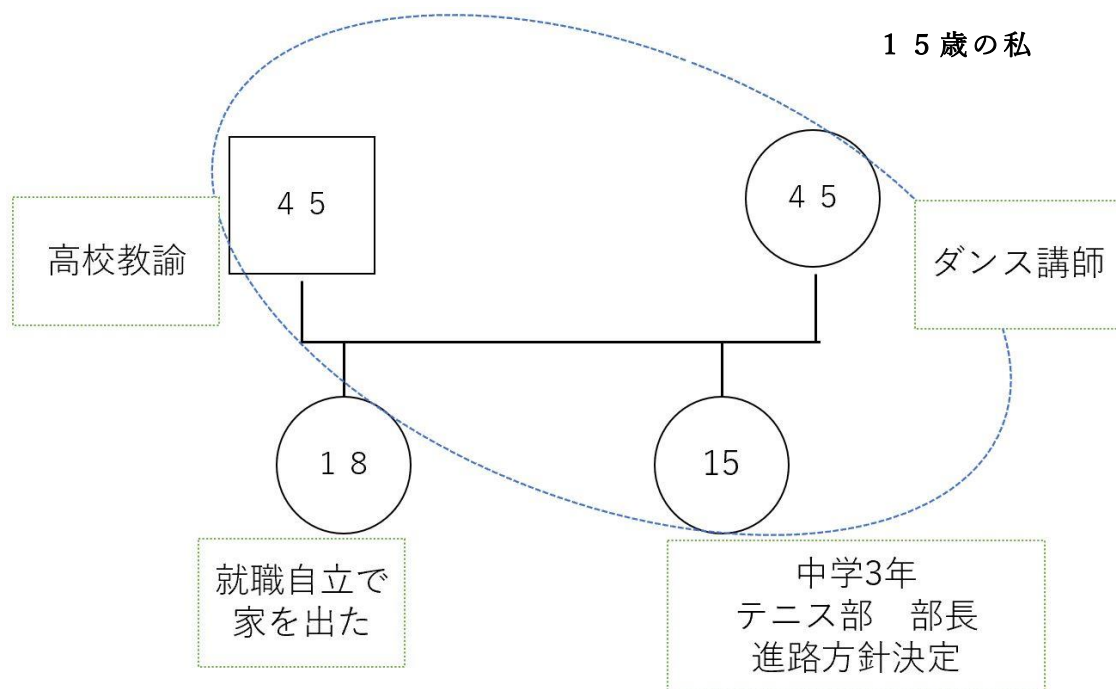
今回の連載を書きながら、私の子育てエピソードを当時の長女（小学高学年頃）がマンガに描いてくれていたことを思い出し、宝箱をひっぱりだしました。チラシの裏に手書きで書かれた棒人間マンガ。せっかくなので、後半にご紹介しようと思います。

「15歳の時」のジェノグラム・・・思春期の思い

2009年10月24日のワークショップのジェノグラム面接演習のテーマは、「15歳の時」の私になって面接を受ける、というものでした。

面接者の定番フレーズ「ご家族のことについて教えてください。」という言葉で、15歳にタイムスリップした私がインタビューに答え始めました。

中学3年生になった私は、その春、就職のために家を出た姉を除いて、両親と私の3人で生活をしていました。中学入学時から続けていた軟式テニス部では、部長として活動し、部活仲間と共に、同じ地域の高校へ進学するという方向性も決まっていました。15歳の私について、20分ほど語りが続きました。



面接後に、面接者と受け手の私で、面接のフィードバックを行いました。面接者は、「とても活発に元気に過ごされていたと感じました。今の木村さんに通じるものがあるように感じました。」と感想を伝えてくれました。その感想を聞いて、私は面接では話せなかったことを伝えたいとなりました。

実は、15歳の私は、とても疲れていました。私の母は、私が中学1年の秋から中学2年の秋まで、家を出て父とは別居していました。私は父と、姉は母と生活していました。←

1年ほどの別居生活の終わりは、当時住んでいた教員住宅から、一戸建てを購入して、そこへ母と姉が戻るという選択でした。←

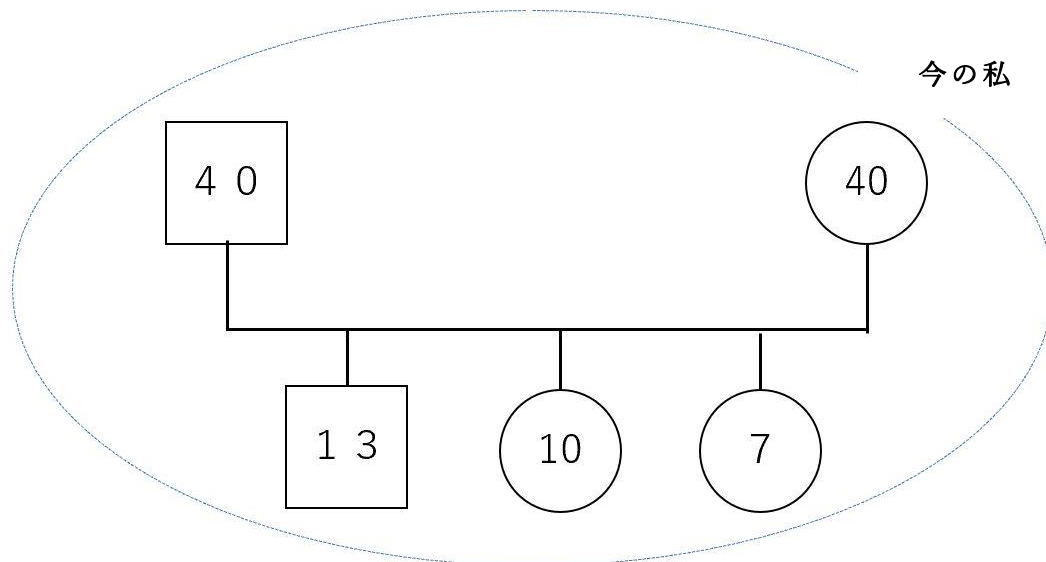
私は、母と一緒に生活できることになったことをとても嬉しく思いました。同時に、また母が家を出ていくようなことにはなって欲しくないと思いました。そこで、母ができるだけ家庭生活に苦痛を感じないように、という子どもらしからぬ母への気遣いを持ちました。家事を手伝う、というのは、洗濯や食後の食器洗い、父と母が二人だけにいる時間を避けるように、その仲介となるべく自分の位置取りに気がつかいました。母のいる生活は嬉しいと同時に私にはとても気を使う時間であったことは間違いありません。←

面接の時には語れませんでしたでしたが、本当にわかって欲しかったのは、この気持ちだったのですね。今、わかりました。←

←

この「15歳の時」に戻ったジェノグラム面接では、自分の歴史について振り返る、ということが狙いだったと思います。人を支えるには、たくさんの方があるということ、今ある目一杯だけではなく、今までのことも資源である、ということは常日頃の学びにも通じます。

確かに、15歳の私は、頑張っていたし、色々な気遣いもしていました。けれども、そんな自分を、時がたち大人になった私は、労ってやりたい、という気持ちと、もっと子どもらしくありたかったよね、と声をかけてやりたいと思いました。そして、この15歳に戻って面接を受けたことで、私は、「今の自分」（2009年の自分）について気がつきました。「今の自分」は、以下のようなジェノグラムです。



日々の仕事に追われる私は、のんきな長男を始め、子どもたちの手のかかりように、少々呆れていました。もう少し、家の手伝いも、自分たちのことも、「ちゃんとできないものか？私が、中学生の時は、もっといろんなことができていたのに・・・」、そんな風に思うこともしばしばありました。

15歳の私に戻って面接を受けた時に、私は、気がつきました。「そうか、私の子ども達は、のんきでいいのだ。これが子ども時代なのだ。何の気兼ねもなく、のんきに、好きに生きてくれればいいのだ。」とわかったのです。

子育ては、日々、精一杯過ぎて、視野が狭くなっていることも多々あります。だからこそ、支援者は「今」だけではない、その人が持っている「今までのことについての」資源についても視野を広げられると良いと感じました。この時、悩んでいたわけでもなく、日々を過ごしていました。けれども、ジェノグラム面接演習での被援助者体験が、私に思わぬ発見をもたらしてくれました。

母のストライキ！



散らかり放題の部屋

2



疲れて帰宅すると

母

1



やる気がなくな

4



3



6



空腹の子ども

5



8



7

翌日



母のストライキは・・・

なんだか楽しそう♪



子ども達の潜在能力を引き出した

©miyu

必死だった子育て、過ぎ去ってみると、楽しく笑える思い出。

良いお母さんではなかったかもしれない。

あの頃は、ごめんね、って思うことたくさんあった。

でも、今は、子ども達、ありがとう！

おわり